

日本学教育の映像資料 『日本沈没』*

ー1973年と2006年との比較からみるナショナリズム化ー

朴正義**

(e-mail: kannan322@hotmail.com)

目次

1. はじめに
 2. 1973年度版 『日本沈没』
 3. 2006年度版 『日本沈没』
 4. おわりに
-

1. はじめに

最近、日本社会のナショナリズム化が指摘されているが、それを学生たちに説明できる日本学教育の資料は少ない。今回、このような資料の一つとして、映画『日本沈没』を紹介したい。これは、映像資料のため大学生だけでなく高校生にも容易く理解でき、さらに日本社会全般の時代的変遷を理解するのにも役立つ日本学教育の貴重な資料といえる。

映画『日本沈没』は、小松左京¹⁾によって書かれたSF小説『日本沈没』を原作としたものである。小説は、1973年に光文社より上下2巻が同時刊行され、当初は3万部ずつだったが、版数を重ねるごとに出版数が増え、上巻204万部、下巻181万部の計385万部まで出版部数を伸ばし、当時「空前の大ベストセラー」と評された。²⁾

* 이 논문은 2014년도 원광대학교 교내연구비로 연구함.

** 원광대학교 일어교육학과 교수 일본학

1) 日本SF界を代表するSF作家。京都大学文学部卒。高橋和巳や三浦浩と交流を持つ。原爆を投下したアメリカに対する反感から「反戦平和」を唱える一時期日本共産党に入党していたが、共産主義思想を真に信奉してのものではなく、ソ連の原爆開発にショックを受け共産党を離党している。いわゆる、その時代を反映するリベラルな知識人であった。

その内容は、

地球物理学者である田所雄介博士が、地震の観測データから日本列島に異変を感じ、潜水艇操艇者の小野寺俊夫の協力を得て小笠原諸島沖の日本海溝に潜り、海底を走る奇妙な亀裂と乱泥流を発見した。田所博士は、その後も他のデータを集め続け、「日本列島は、一年以内に地殻変動で日本海溝に沈没する」という結論を出した。

これに対し半信半疑であった政府も、山本総理と政界のフィクサー³⁾である渡老人の強い意志によって、「日本沈没」に備え日本人を海外へ脱出させる「D計画」を秘密裏に進めた。その後、日本各地で巨大地震が相次ぎ、休火山までが活動を始め、「日本沈没」が現実のものとなった時点で、諸外国の協力を得て「D計画」を遂行し、日本人を海外へ脱出させた。

四国を皮切りに次々と列島は海中に没し、日本の中心部である日本アルプスが最後の大爆発を起こして日本列島は完全に消滅する。海外に脱出した日本人は、国を失った放浪の民として世界に散らばっていった。

現実的には、今も将来も日本列島が沈没する可能性はなく、むしろ成長・拡大し続けている。⁴⁾しかし、刊行された1973年という年が、関東大震災(1923年)から50年目という節目にあたり、そしてこの時期、伊豆半島を中心として小規模の地震が頻繁に発生していた。これらの状況は、人々に小説の内容を現実のものとして捉えさせるのに十分であった。さらに、地震を越えた「日本沈没」という設定は、大規模災害に対する不安感と恐怖心を日本社会全体に巻き起こした。小説『日本沈没』が刊行された後、「日本沈没」が一大ブームを呼び起こし、これを原作とした映画、テレビドラマ、ラジオドラマ、漫画が続々と製作された。この中でも、今回は1973年と2006年に製作された映画『日本沈没』に注目した。

1973年度版映画は、小説が完成される前より準備されたもので、小説のテーマ「日本人が国を失い放浪の民族になる」⁵⁾をそのまま踏襲する形で製作された。⁶⁾歴史的に他国から侵略らしい侵略を受ることなく、島国日本に籠もってさえいれば安全であった日本人にとって、「国を失い、放浪の民族となる」という設定は大きな衝撃であった。また、この時

2) 『東宝特撮映画大全集』 ヴィレッジブックス 2012年 p.164~167

3) ここで「フィクサー」と称したが、それは「事件の調停やもみ消しをして報酬を得る黒幕的人物」という意味であるが、ここにおける渡老人の性格は少し異なる。過去に、「政財界のドン」という言葉が盛んに使われた。この「ドン」は小さな事件ではなく、その財力で日本全体を動かす力を持っていた。この映画に出てくる渡老人も山本総理を作り出した人物である。過去に、財団法人日本船舶振興会（現公益財団法人日本財団）会長であった故笹川良一が有名である。現在はそれに匹敵するような者は存在しない。

4) 横井技術士事務所技術士（応用理学）横井和夫(http://www.geo-yokoi.co.jp/Touhoku_Hukusima/NihonTinbotu.htm)

東京大学地震研究所 山岡耕春(http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/filmnc06/eri_qa.html)

5) 구건서 『일본 영화와 시대성』 2007년 제이앤씨 p.549

6) 『東宝特撮映画大全集』 ヴィレッジブックス 2012年 p.164~167

期は、高度経済成長を続けている反面、1973年の狂乱物価とも言われたインフレーション、オイルショックなどの社会不安もあり、高度成長にも陰りを見せていた。

それから30年以上経った2006年は、小説『日本沈没』が刊行された時期とは社会的背景が大きく異なっていた。バブル崩壊以後、日本は経済沈滞が長く続いていた。それに反し、アジア各国の経済は急成長し、特に中国には総合経済力において抜かれ、さらに韓国には経済だけでなく全ての分野で肉迫され、ある分野においては抜れるに至った。このような状況下で、アジアにおいて唯一先進国かつ経済大国であるという絶対的な地位を失い、日本人は相対的に自信を失い始めていた。その反発から、日本人は強い日本を求め始めた。これが、2006年度版映画の社会的背景である。

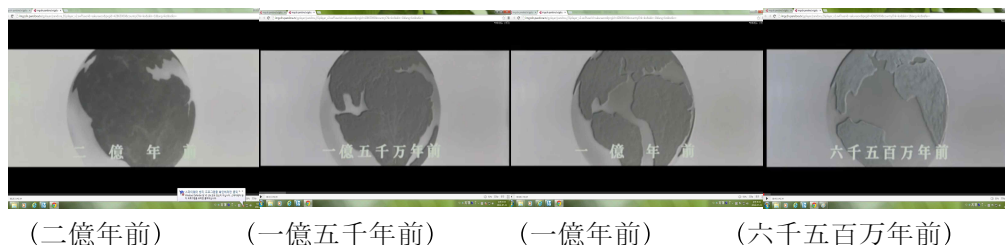
この二作の映画は、共に同じ小説を原作としながらも、それぞれの時代的背景が異なり、それぞれが意図するテーマに大きな違いが見られた。ともにヒット作であったため、それぞれのテーマがそれぞれの時代の日本社会的要求に応えたとも言えるだろう。今回は、この二作の映画を比較することによって、現在の日本社会のナショナリズム化を見ることができた。

II. 1973年度版映画『日本沈没』

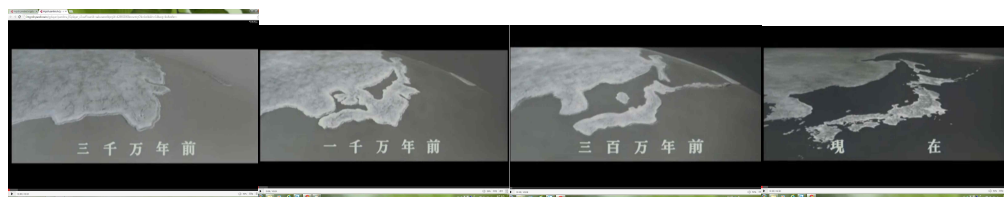
1.

1973年度版映画『日本沈没』は、大手映画会社である(株)東宝によって、すでに述べたように小説の刊行前から映画化の企画が進められた。1973年12月29日より正月映画として公開されるや、約880万人の観客を動員し、配給収入約16億4000万円(1974年邦画部門興行収入1位)を挙げるなど、当時としては空前の大ヒット作となった。⁷⁾

映画のオープニングに、二億年前から現在に至るまで地球上で日本列島が形づけられていく映像が映し出される。

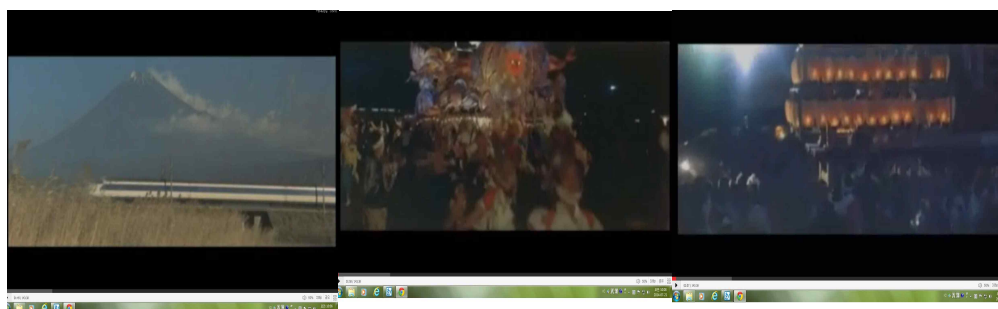


7) 『東宝特撮映画大全集』 ヴレッジブックス 2012年 p.164～167

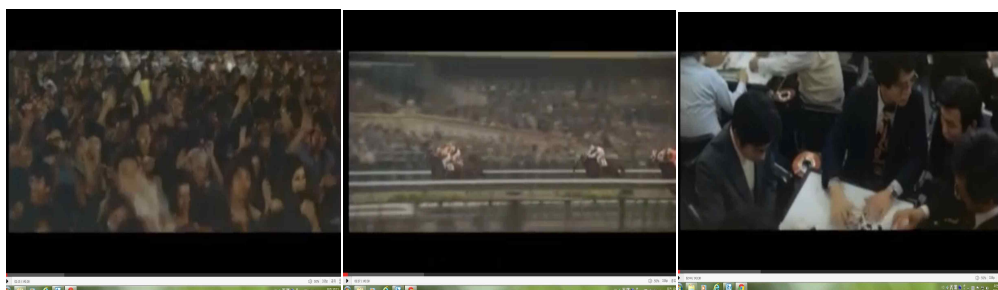


(三千万年前) (一千万年前) (三百万年前) (現在)

続いて、1973年当時の日本社会が映し出される。その映像の最初が、日本が世界に誇る美しい自然富士山の前を、やはり日本が当時世界に誇った新幹線が通り過ぎる光景。日本の美と技術を示し、日本の栄華を誇示しているといえる。次に、この栄華を謳歌するように、青森のねぶた祭り・秋田の竿頭祭り・徳島の阿波踊りで人々が浮かれている姿が映し出され、さらに競馬・麻雀などのギャンブルに熱狂している人々の姿が映し出される。



(富士山と新幹線) (ねぶた祭り) (竿頭祭り)



(阿波踊り) (競馬) (麻雀)

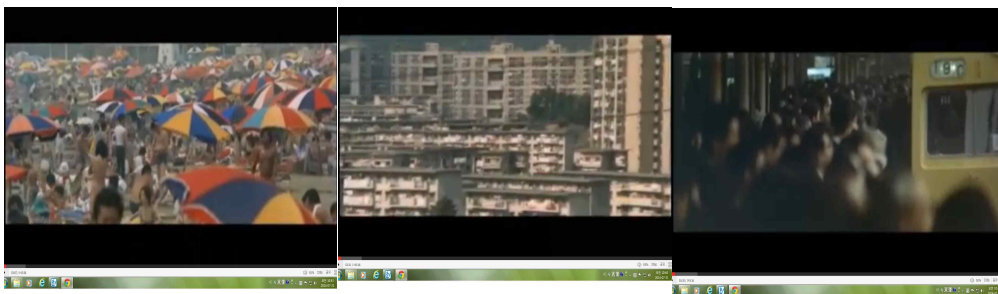
次に、日本の産業界を代表するものとして自動車産業が映し出されている。人で賑わう

新車の展示会や、自動車の世界に輸出される光景など日本の経済力を誇示している。

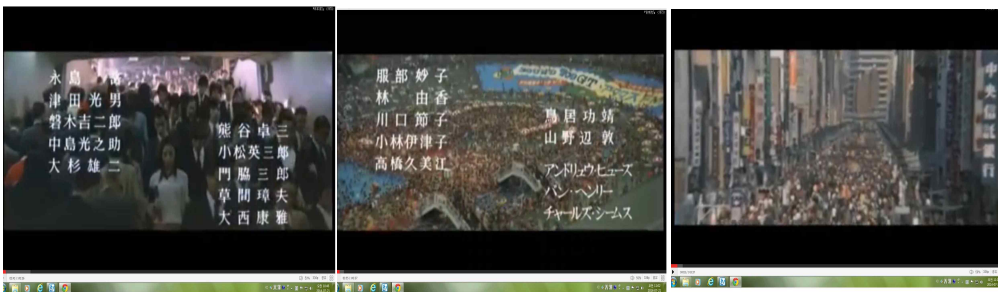


(新車の展示会) (自動車の海外輸出 1) (自動車の海外輸出 2)

さらに、最後には、人が溢れる海水浴、住宅密集地帯の団地、車の渋滞、出勤風景の満員電車、また人々が溢れかえり泳ぐこともできない都会のプール、大量の人々が繰出している銀座の歩行者天国が映し出されている。ここに、栄華を謳歌しすぎ、人が溢れだし無秩序化した1973年当時の日本が映し出されているといえる。この最後の場面は、日本社会への警告といえる。



(海水浴場) (団地) (満員電車)



(出勤風景) (都会のプール場) (銀座の歩行者天国)

オープニングの映像には、敗戦後の悲惨な姿はどこにもなく、経済大国として成長し続

け、彼らが追い求めていた西洋社会と肩を並べ、経済力においてアメリカに次ぐ世界二位に踊り出た経済大国日本の姿が映し出されている。日本人が自信に溢れ、有頂天になっていた時代でもある。

最初に日本列島が形づくられていく映像は、日本列島が元々この地球上に存在していたのではなく創り出されたものであることを示すもので、またいつか無くなるということを暗示するものである。そして、それは、後に続く映像「栄華を誇る経済大国」日本も現在浮かれているが、それもいつかは終焉を迎える、という警告でもある。⁸⁾

1973年度版映画『日本沈没』は、現在栄華を誇る日本もいつしか滅亡することを暗示しながら、始まるのである。

2.

突然、東京に大地震がおこり東京全体が火の海に包まれる。地震対策本部は、自衛隊のヘリを使っての必死の消火・救命活動を繰り広げるが、絶対的装備の不足でなすすべがなく、見す見す360万人もの死者を出す。この時、山本総理は「ヘリによる消火弾投下は、あまり効果があるように思えない。しかし、今のところは、この自衛隊のヘリに頼りたくない。(略)それでは、偵察機や戦闘機は何のために。国を守るとは、国民の生命財産を守るとは、一体何なのだろう」(01:02頃)⁹⁾と呟く。ここに、国を守るために保有しているはずの偵察機や戦闘機が国民を守るために何の役にも立たないという現実、どうすれば国を守り国民を守ることができるのか、「国を守ること、そして、国民を守ること」の意味を映画は観客に問いかけている。

「東京大震災」の場面で注目すべきことは、避難民に対して皇居の解放である。警視庁から、山本総理のいる緊急非常対策本部へ、「宮城前で、機動隊と押し寄せる民衆との間で混乱状態になっていますが、武器を使用して制圧していいのでしょうか」(1:03頃)との緊急連絡が届いた。皇居(宮城)は東京のど真ん中にあり、その広さは東京ディズニーランド(0.51km²)の三倍弱の1.42km²で、緑に包まれた大公園ともいえ、まさに避難場所として最適の場所である。その皇居に、火に包まれ逃げ場を失った民衆が押し寄せてきたのである。当然のごとく皇居の門は固く閉ざされ、その前を機動隊が民衆の侵入を阻止していた。しかし、大量に押し寄せてきた民衆を阻止しきれず、警視庁は武器使用の許可を山本総理に求めたのである。

8)고평국(약) 『일본침몰』 범우사 2006년 p.568

9)1973年度版映画『日本沈没』の時間経過を表わしたもので、IIでは以下全て同じである。しかし、使用するビデオによって、少し時間のズレがある。今回は、インターネット(<http://flvr.pandora.tv/flv2pan/flvmovie.dll/userid=sakuraxoo&prgid=42865000&countryChk=ko&skin=1>)から取ったものである。



(皇居の門前に押し寄せる民衆)

もし、何万人もの避難民が皇居に乱入した場合、皇居内の治安は崩れ、皇室の安全を脅かすことになる。そして何よりも、その後、皇居が避難所と化することは必至であり、高い塀に守られてきた天皇の尊厳を失墜させることになる。さらに、天皇は日本国の象徴であるため、即日本国尊厳の失墜をも意味する。このため、「武器を使用してでも避難民を追い払え」という命令を警察庁は期待していたのである。

それに反し、山本総理は「門を開けてください。山本です。門を開けてください。非常事態対策本部長の内閣総理大臣の命令です。直ちに、門を開けて避難民を宮城内に入れてください」(1:04頃)と、警視庁ではなく宮内庁(現在は宮内省)長官に直接命令を下し皇居の門を開けさせた。しかし、現実の日本において「皇居の解放」はあり得ないことであり、本来ならこのようなドラマ設定はあまりにも政治的すぎて避けられるべきものである。ならば何故、敢えて、このようなドラマ設定をしたのか。ここでの「非常事態対策本部長の内閣総理大臣の命令です」という台詞は、天皇の権威より国民の代表である首相の命令が上であることを示すものである。即ち、「日本の威厳より、国民の命が重要である」と訴えていることを、見逃してはならない。

またこれは、消火活動においても「日本の中枢である官庁街を守れ」という命令がすぐに撤回され、「民家が密集している地域を重点的に行え」という命令に変更されたことから窺える。即ち、たとえ国家の中枢が崩壊しても、国民を救えという強い政府の意思を現わしている。ここに、1973年度版『日本沈没』は、「国民を守ること」が「国を守ること」より優先することを明確に示していると言える。

3.

「日本沈没」が現実のものとなり、政界のフィクサーである渡老人が今後の対策として、三人の専門家が三つのケースに人々を分けて考えた出した案を山本首相に提示した。その三つのケースとは、①世界のどこかに日本国を再建する、②日本人が世界に渡り帰化しその国の人として暮す、③どこにも行けない人たちのため、であった。

①は理想的であるが、第二次世界大戦時の神風に代表される日本人のイメージに対する警戒心が強く、このためどこの国も自国内に日本国を建てることを許すはずはなく、実現

不可能なケースであった。これは、オーストラリアの政府関係者が神風特攻隊の写真を見ながら「日本人を500万人も受け入れたら、この国にもう一つの国ができてしまう」(1:20頃)と話す言葉からも、日本国建設に警戒を示していることが窺える。

また、②においても、山本総理が「もし人口が10万の島国であって、それが沈んでしまうとしたらどうする？日本だって5千人や1万人ぐらいは引き受けるだろう。そして、問題は直ちに解決だ。問題の本質はだな、1億1千万、人間の、君、人間の数だよ」(1:56頃)というように、世界の国々は1億1千万という大量の日本人の受け入れに難色を示していた。さらに、この②は、日本人が全世界に散らばりその国の住民として生きていくことで、日本国・日本民族の終焉を意味するものでもあった。

そして、③の「どこにも行けない人たちのため」、これについての説明は映画ではなされていないが、日本と運命をともにすることを意味したものであろう。

さらに、三人の専門家たちは三つのケースを提示した後、別に「一層のこと何もしないほうがいい」との案も準備した。つまり「1億1千万人の日本人は、日本と運命を共にした方がいい」という結論を、三人の学者たちが最後に提示したのである。これは、③のケースに繋がるもので、全ての日本国民は日本国家の消滅と運命を一緒にすべき、ということである。日本国土があるから日本国家があり、日本国家があるから日本国民があることを意味している。つまり、ここに日本人の強い国民国家観が見られ、国民を国家に縛り付け、日本人の運命と日本国の運命を同一視している。このため「一層のこと何もしないほうがいい」との結論が出たのである。

しかし、山本首相は「二億年前までは爬虫類の世界であった。それがどうして滅びてしまったかという、適合条件。生きていくためには、他の動物を押し退けて自分たちだけ都合の良い条件を作りあげ、このため数がどんどん増え、異常繁殖してしまった。(略)人類もいつかは滅びるであろう、しかし、どれだけ生き延びられるかが重要である。(略)これからは、私が直接国々を回って頼むつもりです。100万人、これがだめだったら10万人、1万人、1000人、いや、たとえ一人だっていい。(略)爬虫類の血は冷たいが、人間の血は暖かい。これを信じるしかない」(02:00頃)と言って、国家がやるべきことは国民の生命を守ることで、さらに、それは日本人だからではなく、一個の人間としてその命を守ることだと述べ、「何もしない方がいい」という案に反発する。即ち、日本国民を日本国と切り放し一個の人間と考えたといえる。そして、同じ人間として世界の国々の人道的援助を期待し、②の案である「D計画」を推進した。

結果として、最初難色を示していた世界各国は、「日本沈没」が現実のものとなると、自国の輸送機、船舶を動員してまで難民救済に当たった。結果として、災害に合わずに生き延びえた者約3400万人が海外に無事脱出し終え、日本が完全に沈没しこれ以上救出する対象がなくなった時点で「D計画」は打ち切られた。

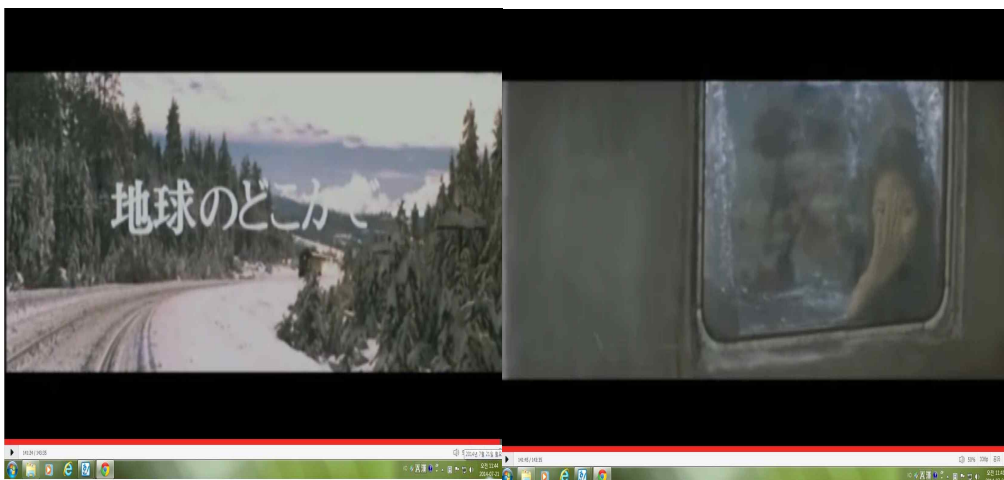
「国より大事なものは国民の命である。このために国は全てのことをしなければならぬ」が、1973年度版映画『日本沈没』の結論である。これが、東京大地震の時に考えた、「国を守る

とは、国民を守るとは、一体何なのだろう」の答えといえる。しかし、問題は、海外に移住した日本人が、日本人であることにこれからも意味を持ち続けて、その社会で生きていくべきかである。

映画の最後に渡老人は、「自分はもう年寄りで、この先生きて延びても意味がない」と、ここに残り日本の最後を見届けるとともに日本人として死ぬことを決心するが、自分の姪には「どこかの国で日本人と、いや、世界中のどこの国の人間とでもええ。仲のええ夫婦になり、仲のええ夫婦になり、丈夫ぶな、丈夫ぶな児(やや)をなあ」(02:20頃)と言い残す。1973年度版は、日本国土が沈没し日本国が滅亡した後は、世界各国に移住しても生き延びるのが重要で、そこで日本人であることに拘ることなく一個の人間として生きていけばいいと語っている。

1973年度版映画では、自ら日本での死を選んだ渡老人と田所雄介博士以外、山本総理を始め「D計画」を推進した者たち、さらに行方不明であった阿部玲子、その彼女を探し続けた小野寺俊夫も、全ての者たちが生き延びている。そこには、日本を守るために犠牲になる者など存在しない。「D計画」の目的が、国を守るのではなく、人の命を守ることであり、当然の結果と言えるであろう。

この時期は、大学に吹き荒れた学園紛争は終焉を迎え、そのエネルギーが学園から外に放され市民運動が活発化し、日本を告発し始めた時期であった。たとえば、現在韓日関係の争点となっている日帝強占期時代の「従軍慰安婦」「強制労働」問題の究明、戦後の「在日朝鮮人への差別撤廃」への運動が始った時期でもあった。日本人は、それまで自分達にとって絶対的な存在であった日本に対して疑いを持ち始めていた。明治から始った強い国民国家観のもとに絶対的忠誠の対象であった「日本」というものを、根本から考え直し始めた時期といえる。それまで切っても切り離せないものと考えられて来た「日本」と「日本人」を分離して考え、さらに、日本をなくした場合の日本人を設定し、映画は「日本人にとって日本とは何か」を観客に問い続けた。



(小野寺俊夫の恋人阿部玲子が避難民としてシベリア鉄道で移動している姿)



(小野寺俊夫が避難民としてアメリカ大陸の砂漠に行く列車に乗っている姿)

エンディングに、世界に散らばっていく日本人を描き出している。シベリアに行く阿部玲子、アメリカ大陸に行く小野寺俊夫が映し出されている。しかし、二つの場面どちらも未知の地における不安感を醸し出している。今まで自分達を保護してくれた日本というものがなくなり、日本人でなく一個の人間として生きていく不安感を示し、映画が終わる。

Ⅲ．2006年度版映画『日本沈没』

1.

2006年度版『日本沈没』も、前作1973年度版と同じく(株)東宝の製作・配給で2006年7月15日公開され、観客動員数415万人、配給収入約53億4000万円、国内興行順位第4位のヒット作であった。監督樋口真嗣氏は、前作の映画を「自分が映画製作を志すきっかけとなった作品」¹⁰⁾と語るが、その内容は、小説とも前作とも大きく異っていた。

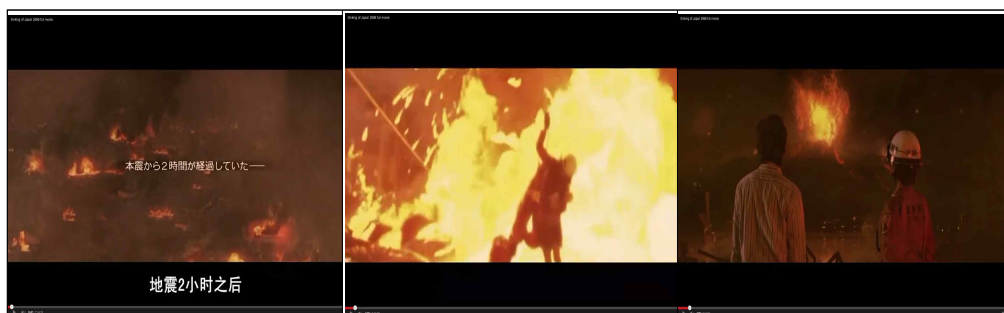
また樋口氏は、前作映画のリメイクというよりも原作小説の再映画化というスタンスで挑み、前作に欠けていた一般の市井の庶民の視点を意識的に取り入れたと語っているように、登場人物の設定や役回りが大きく異なっている。¹¹⁾前作では、主人公であるはずの小野寺よりも田所博士や山本総理さらに渡老人の行動を中心に物語が展開され、一般庶民は重要な役割をなさなかった。ところが、2006年度版では小野寺俊夫と阿部玲子の恋愛が物語の展開の主軸となり、彼らを中心とした庶民の生活が映し出され、そこにお互いを思いやる日本人の情の美しさが語られている。これは、最後の場面の避難民の姿からも見いだされた。

10)<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E6%B2%88%E6%B2%A1>

11)<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E6%B2%88%E6%B2%A1>

さらに、前作との決定的な違いが、主人公小野田の一命を犠牲にした英雄的行動によって、日本国土が沈没から救われ、日本の滅亡が防がれるという物語の展開である。結果として、生き延びた日本人は日本の再生を力強く誓い、映画は終わる。これは、原作である小説のテーマ「日本人が国を失い放浪の民族になる」を全く無視したものであり、前作さらに原作とも全く別の主題を持った映画であるといえる。そして、前作の「日本の滅亡」という警告から、「英雄によって日本が救われる」という感動へと変化している。

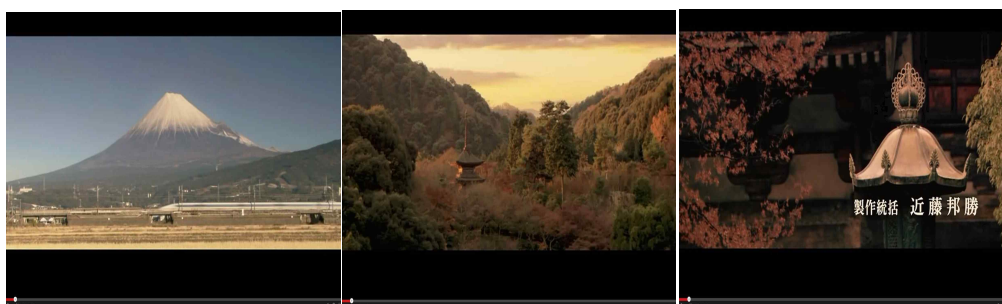
2006年度版のオープニングは、震災の映像から始まる。



(地震後の火災風景) (少女を火の海からレスキュー隊員が救う) (火山の突然の噴火)

この場面では、災害の悲惨さより、レスキュー隊員の英雄的行動に焦点が合わされている。そして、最後に火山が突然爆発し、これからおこる「日本地没」への警告を発する。

それに続いて現在の日本の姿が綴られていく。まず、前作と同じく日本の美の象徴ともいえる富士山の前を新幹線が通過し、伝統建築物である古都奈良・京都の神社仏閣、古い京都の町並み、続いて雪に埋もれた白い日本、さらにやはり日本の象徴とも言える桜、これら美しい日本の数々が絵巻のように次々と映し出されていく。これを見せられた観客は、自然とその美しさに魅了され、この美しい日本がいつまでも続いてほしいと願うであろう。





次に、経済大国日本を示す東京の近代的な超高層ビル群が映し出され、この経済大国の原動力である人々の出勤風景が映し出され、次に若者の活気が息づく竹下通りなど



都会の風景が映し出されていく。これらは前作(1973年度版)と同じ都会の風景であるが、前作では人が溢れ混雑した無秩序の都会の姿であったのに対し、2006年度版では人々が秩序正しく行動している姿が強調されている。

続いて、長閑かな農村の風景、再び日本の美しい山・川・海の自然、そして、ゲートボールに興じるお年寄りなど、都会だけでなく農村を含めて、善良な人たちがこの平和な日本の中で暮す姿が映し出されている。



最後に巨大都市東京の全景を映し出し、さらに宇宙から見た日本列島、そして日本列島が「沈没」していく姿を映し出しながら映画は始まる。



(空から見た東京のビル群)

(宇宙から見た日本列島)

(沈没し始めた日本列島)

2006年度版の始まりの映像を見た観客は、美しい日本に魅了され、人々が秩序を守り長閑かに暮らすこの平和な日本に生まれたことに感謝し、この日本にいつまで住みたいと痛切に感じるであろう。このため、最初に見せられた災害で命をかけて救助にあたる映像のように、どんな犠牲をはらっても日本を守り抜かなければならないと卒直に感じるのである。

この後、2006年度版は、この守るべき日本がなくなれば我々どうなるのか、その時人々はこの日本を守るために何をすべきかを、最後まで問い続けるのである。オープニングで、守るべき価値あるものとして、国、つまり日本を視覚的に観客に訴えている。

2.

地質学関連学界の最高権威「アメリカ測地学会」によって「40年以内に日本は沈没する」と発表されるところから、映画は始まる。しかし、田所博士の調査によって、日本沈没は1年以内と判明し、さらに日本各地で地震、火山の爆発など地殻変動が起り、政府は「日本沈没」を既成事実として受け入れた。

2006年度版では、鷹森危機管理大臣から海外避難計画「D2」の企画書を受け取った時、山本総理は「様々な分野の見識者から日本の未来に関しての意見書を出してもらったんですが、（略）特殊な意見、何というか、普通に考えると特殊な意見なんですが、全く違う分野の何人から出たということなんです。それは、つまり『何もしないほうがいい』。愛する者と共にこの国と滅んだ方がいい。そのような考え方が出るということ自体が、日本人が他の民族と決定的に違うところかも知れませんが」（0:38:00頃）¹²⁾。さらに続けて「総理としての考えではなく、私個人としては、この考えが一番しっくりと感じました」と語っている。勿論、その後すぐに山本は総理の立場としてそのような考えを否定し、避難民受け入れ交渉のため海外へ旅立つ。

山本総理の言葉から、「日本民族は特別で、日本人は日本国がなければ生きていけず、また生きていく価値がない」とも聞き取れる。前作のように、「国を守ること」と「国民を守ること」が二者択一で語られるのではなく、つまり国と国民は一体であり、「日本国を守ること」＝「日本人を守ること」という公式を導き出している。さらに、この後映画は、「国を守ることが、自分そして自分が愛する人を守ることだ」という主旨で物語が展開する。

この守るべきものとしての国「日本」が、主人公の友人で同じ潜水艇操艇士である結城達也の言葉を借りて語られている。

すでに「日本沈没」は現実のものとなった段階で、小野寺は結城達也にイギリスに潜水艇操艇士の職があるので一緒に行こうと勧めた。この提案は、難民としてでなく、合法的に

12)2006年度版映画『日本沈没』の時間経過を表わしたもので、Ⅲでは以下全て同じである。しかし、使用するビデオによって、少し時間のズレがある。今回は、インターネットhttp://www.youtube.com/watch?feature=player_detailpage&v=IUp3rQXuYZAから取ったものである。

海外への移住を保障し、さらに、そこでの生活をも保障されているため、家族揃って幸せに暮せるまたとない機会であった。しかし、結城は日本が沈没することを知っているにも関わらず、それを即座に断り、「田所先生、日本を救うために何か始めようとしている。それを手伝いたいんだ」(00:56頃)と田所博士を助けるために日本に残ると言う。田所博士が考えていたのは、日本を地下に引き摺り下ろすプレートに爆薬を仕掛け、それを切断して日本を沈没から救おうというものであった。それを遂行するためには、海底深く潜り爆薬を設置する優秀な潜水艇操縦者が必要であった。結城はそれに志願したのであった。しかし、成功率は低く、成功しても日本を沈没から救えるという確証もなかった。それにも関わらず、一命をかけて志願しようとする結城の気持が小野寺には理解できなかった。愛する家族を守るためにも結城はイギリス行を選ぶべきであると小野寺は考えていたのであった。

「何故？」という小野寺の問いに、結城は「息子、家の息子さ。俺が餓鬼のころ好きだった田舎の浜に連れて行ってやりてえんだ。そこで、こいつに、海を教えてやりてえんだよ。馬鹿見てえだろ」(00:56:39頃)と応えた。子供にとって大事なのは父親自体でなく、父親が生まれ育ちそして子供が生を受けた日本である、全てがここにある、この日本を守ることが自分と子供を守ることだと訴えている。「馬鹿見てえだろ」という言葉から、それに対する理論的確信はないが、見えない糸に引っ張られるように、日本を救うことが自分の使命と結城は感じとっていた。2006年度版においては、「日本人にとって日本が全部であり、これを守ることが自分達の使命である」に対する理論的根拠はなくても、小野寺がそうであったようにこれに対し異議を唱えることは許されないのである。

また、小野寺は、恋人の阿部にイギリス行へ一緒に行こうと伝えるが、結果として断られる。その内容が、次の通りである。(1:03:50頃)

小野寺：(イギリスへ)一緒に行かないか。一緒に来てほしいんだ。先方に頼んで、君とみさきちゃんのチケットも取ってある。

阿部：私はレスキュー隊へ戻らなければならない。みさきのような子供たちが救助を待っている。

小野寺：だけど、日本は沈むんだよ。言っていることは分かっているけど、今だったらイギリスへ行ける。ぐずぐずしていたら、見捨てられるんだよ。ともかく僕は、君とみさきちゃんを助けたいんだ。

阿部：だったら、おばちゃんたちは、平気で見捨てるの。

小野寺：平気じゃない。きれい事を言っても仕方がない。君とみさきちゃん三人で幸せに暮らしたいんだ。

阿部：きれいごとじゃない。私は、自分だけが幸せになんてなれない。

みさきというのは震災孤児で、阿部に引き取られている子である。阿部も神戸大震災の時に孤児になり親戚を頼って東京に来たのであった。血は繋がっていないが自分と同じ境遇であるみさきを不敏に感じ妹のように阿部は思っていた。そのみさきも入れて、小野寺は阿部

に三人で一緒に暮そうと提案しているのである。それにもかかわらず、阿部は即座に拒否したのである。阿部は田所博士の計画も知らず、ただ日本が沈没する運命にあるとだけ知っていたにもかかわらず、イギリス行を拒否したのである。

「日本沈没」があるなしかかわらず、当然祝福されるべきものであろう。特に「日本沈没」を前にして、多くの者が日本を脱出しなければならない状況下において、一人でも自力で脱出してくれば、国にとっても有益なことであり国もそれを望んでいたはずである。そして、国家でもない一個人が日本人全ての責任を取ることは不可能で、自分だけのことで精一杯であるはずだ。しかも、小野寺は自身の母親や姉の家族にも相談することなく、愛する阿部とだけ脱出することを考えたのである。阿部も、小野寺を心から愛していた。しかし、「日本沈没」を前にして、愛する者よりも、また近所の人・家族という次元でなく、日本人全体が運命共同体になってしまっている。阿部の「自分だけが幸せになてなれない」と言っていることから分かる。この時、小野寺は、自分が愛し愛してくれた人たちが日本と一緒に運命を共にすることに苦悩し、自分だけがこの日本を捨ててイギリスへ行くことが許されるものではないと悟り、誰にもいわずイギリス行を放棄する。

1973年度版では、「日本沈没」が発表される前に、主人公小野寺は自身のなすべき任務は終わったので、「ボーナスをください。結婚して恋女房と一緒に海外に逃げ出すんですよ」(1:43頃)と、一緒に「D計画」を推進してきた者たちに告げる。そこには、自分だけ恋人(阿部)と日本を逃げ出すという負い目はない。そこに居合わせた者たちも。その場で即座に心から小野寺を祝福した。さらに、「D計画」を推進してきた者たちも、人命を救えるだけ救えば自分達も日本から脱出すると言い切っている。ここには、日本と運命を共にする考えは微塵もない。「D計画」自体が、日本国を守るのではなく、日本国民というより人の命を守るのことに全ての目的をおいたものであった。当然の結果といえるだろう。そこには、英雄も存在しなく、英雄を作る必然性もない。

ならば、何故日本人全体が運命共同体になってしまうのか。映画はこれを確かなものにするように小野寺の母親の言葉を借りている。母親は「この酒蔵にはね。あちこち家族の思い出が詰まっているの。お父さんの思い出も、沢山染み付いているの。最後まで、お父さんと一緒にいたい。命より大事な場合もあるの。人を好きだっていう気持は」(01:10:30頃)と、自分は国外に逃げないでここに残る、と息子小野寺に伝えている。

ここで、「命より大事なもの」とは、「人を好きだって言う気持」の意味は何か。母は、小野寺や結城、そして阿部のように、愛する者たちのために命を捨てようとしているのではない。母が愛する者たちは、避難するなりして生き残ろうと努力している。それにもかかわらず、ここに残ることを決心する。母が問題にしているのは、これからの未来ではない。人間にとって過去というものがあり、それは亡くなった夫、家族の思い出であり、それらは全て酒蔵とともにこの故郷に存在しているのである。しかし、これら過去は持って出ることにはできない、この故郷を失えば自分には何も残らないと語っているのである。このため、この故郷を捨てることはできないのである。

結城達也、小野寺俊夫が愛し守ろうとしたもの、母親が「命より大事なもの」、それら全てが日本を根拠として存在している。日本を捨てることは、自分を捨てることを意味する。日本人の運命は日本の運命と一緒にある。恋人であり、家族であり、故郷であり、愛する全て、さらにそれらの思いが、日本を根拠として存在しているのである。日本人は、日本とは切り放せないのである。「人を好きだって言う気持」は、その人個人の問題でなくその人が存在する全てのものを好きだということである。これは、故郷、つまり日本を離しては考えられないものである。友人の結城、恋人の阿部の考え全てがこれに通じる。

3.

物語の終盤にきて、小説や前作の映画では、日本政府や世界各国が日本人救出に全力を尽くす姿が映し出されていた。しかし、2006年度版では世界各国は一様に日本人受け入れに冷淡であり、限られた者だけしか海外への移住は許可されなかった。前作では、全世界から輸送機、船舶が危険を犯し日本まで来て人命救助に当たるが、2006年度版では自衛隊の活躍だけが映し出されている。さらに、世界各国で日本人受け入れを拒否するデモが映し出されている。国際社会は信じられず、信じられるのは日本だけと語っているようでもある。



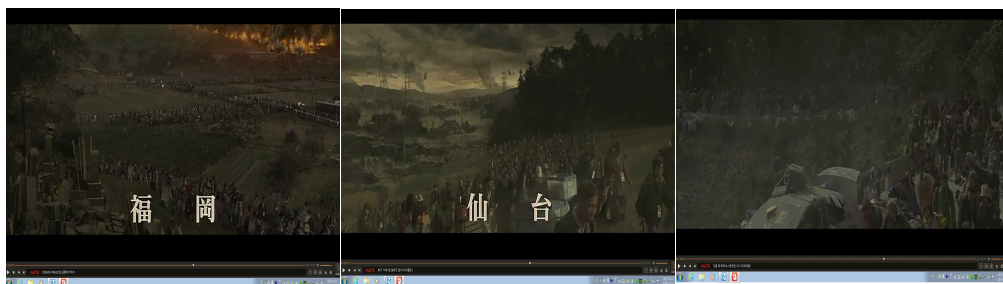
(飛行機への乗り込む選ばれた者と、空港にも入れない残された人々)



(世界各国での日本人受け入れ反対のデモ)

実際は、海外に避難した日本人の数は、2006年度版は前作とほぼ同数の約3400万人であるにもかかわらず、前作では助けられる者は皆助け、その後「D計画」を推進した者が避難するという設定に対し、2006年度版では少数しか海外へ避難できず多くの日本人が日本の国土に取り残されるというように物語は展開している。原作の小説では南関東直下地震で250万人、73年版では360万人の死者・行方不明者が出て、さらに大規模な災害が続き、海外に脱出する前に多くの者が災害で死んでいく。このため生き残り無事海外へ避難できたのが、約3400万という結果になる。2006年度版では、全ての住民の速やかな退避後に、襲来した地震と津波によって東京は水没する。これは、日本人が日本列島にまだ多く残っており、日本再生が可能であることを暗示するものである。

日本に残った人々は海外への避難のため海に出るのではなく、日本列島にしがみつくなかのように未だ沈んでいない内陸部の山頂へ山頂へと不毛の行軍を続ける。しかし、希望を失った避難民の混乱した姿を、ここでは見いだすことはできない。そこに映し出されているのは、自衛隊員の犠牲的精神による英雄的な救助活動、そして、その自衛隊員を信じその指示に卒直に従いながら助け合って秩序正しく避難していく人々の姿である。国際的救助から見捨てられた日本人にとって、日本以外に行くところがなく、頼れるのは日本・日本人しかない、映像は物語ってる。



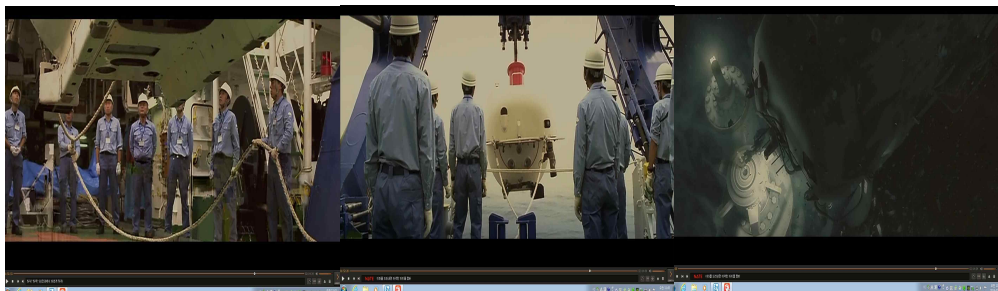
(上へ上へと山の頂きを目指す人々の行進は続く)



(自衛隊の犠牲的精神による英雄的な救助活動が繰り広げられる)

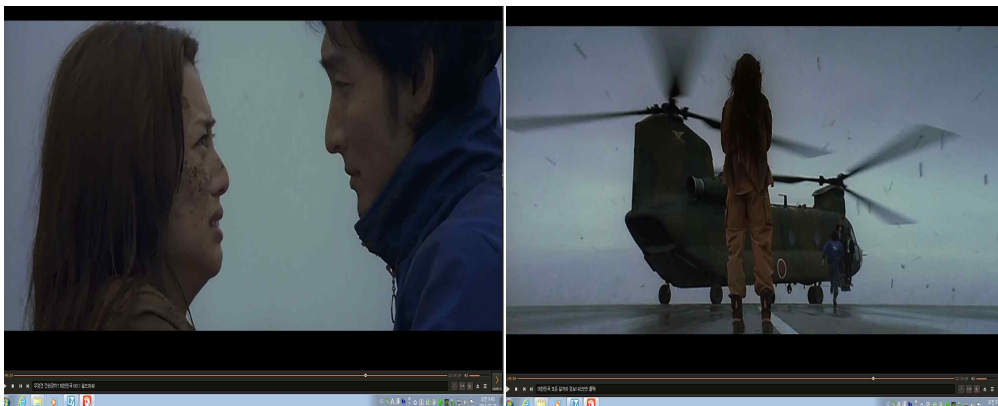
小野寺は、恋人のため、愛する人々のため、その全てが存在する根拠である日本のた

め、命を捨てて潜水艇に乗り込む決心をする。しかし、6000メートル潜れる潜水艇は結城とともに深い海の底に沈み今はなく、2000メートルしか潜れない旧式潜水艇だけしか残っていなかった。この残った潜水艇で4000メートル近く潜りN2爆薬を投下することは奇跡に等しいことで、たとえ成功しても生きて帰還することは100%不可能であった。このため、田所博士は、小野寺の申し出を最初は断った。しかし、小野寺の「日本は、残っている人たちは、どうなるですか」の一言で、田所博士はそれが万が一の可能性であっても、小野寺の申し出を受け入れるしかなかった。ここに、小野寺は、一命を捨てて祖国日本を守る英雄に変身するのである。潜水艇に乗り込んだ小野寺を人々が送り出す光景は、まさに太平洋戦争末期の神風特攻隊を見送る光景を連想させる。小野寺が潜水艇に乗ることを知った後も、縋り付くことなく涙を堪えて見送る恋人阿部の姿も、愛する神風特攻隊員見送る姿を連想させるのに十分である。そして、友人の結城達也が失敗した海底でのN2爆薬投下に奇跡的に成功するが、小野寺自身は深い海の底に沈んでいく。結果として、日本は沈没から免れる。



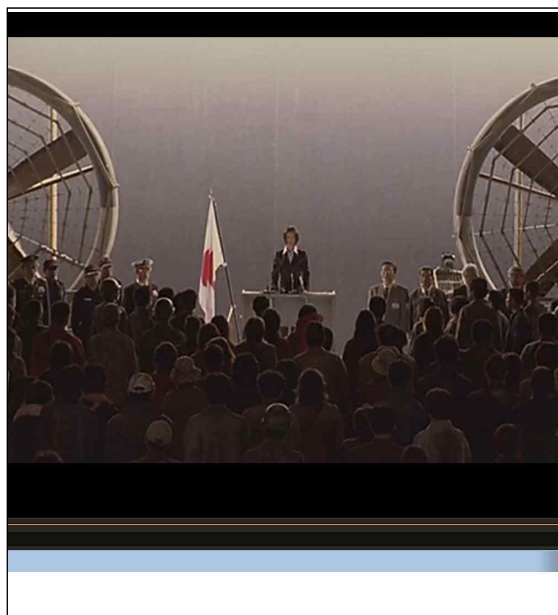
(小野寺が乗った潜水艇を見送る人々)

(N2爆薬投下に成功)



(死の旅に出る小野寺を阿部が見送る)

2006年度版のクライマックスにおいて、総理代理として鷹森危機管理大臣が、臨時に政府庁舎が置かれた海上自衛隊艦艇の上で日本国旗を背にし、放送を通じて全国の人々に日本が沈没から免れたことを告げ、声高らかに力強く「日本再生」を誓う。



(海上自衛隊艦艇の上で日本国旗を背にし、力強く「日本再生」を誓う姿)

まず、今回の未曾有の災害によって亡くなられた人々への冥福を祈り、「我々日本国民は、この試練を乗り越え、心を一つにして日本の再建に取り組みねばなりません」、さらに続けて「海外に避難している日本人全員が帰国できる日が必ずやってくるでしょう」と、「日本人全体が運命共同体である」ことを言葉として表わしている。この場面を観客は感動と共にそれを卒直に受け入れ、自分達が日本人であることを認識するであろう。

さらに、最後に、二人の潜水艇操艇士の犠牲を伴った英雄行動によって日本が救われたことを報告し、二人の名前を読み上げる。その時の台詞は「日本を沈没から救うために、命をかけ戦い抜いた潜水艇のパイロット小野寺俊夫と結城達也の両名に感謝と哀悼の意を述べさせていただきます」と、彼らの行動を「命をかけ戦い抜いた」と称え、その場を日本を守った英雄として彼らを祭り上げる雰囲気に取り込まれていく。前作では見られなかった英雄がここに出現する。

物語りの自然の流れとして、彼の死を知った恋人阿部や母親の悲しむ姿が映し出されるべきであるが、それは一切ない。特に阿部に関しては、「もし、イギリス行を受け入れていたならば、彼(小野寺)は死なずにすんだであろう」と嘆き悲しむ場面があってもいいはずで

あるが、そのようなものは一切映し出されない。ただ、日本が沈没を免れ、母親はつばめが帰ってきたことを喜び、阿部は知り合いの人たちを救助できたことを喜ぶ場面だけが映し出され、日本人が自力で困難を乗り越えた喜びを噛み締めているだけである。このように小野寺の死は悲しむべきものでなく、讃えるべきものと映し出されるのである。第二次世界大戦での戦死者は靖国神社に奉られる神となることによって死が悲しみから感謝へと換ったように、小野寺の死も同じく英雄として感謝すべきものと捉えられている。

英雄の死は観客を感動させ、感動した観客は自分が日本人であったことを誇らしく思い、自分も日本のため戦わなければならないと感じるであろう。これを現実のものとして捉え、「一致団結して現在の日本を強い日本として再生するために力を尽くそう」と2006年度版は訴えているようでもあった。

2006年度版では、「国」と「国民」を切り放して考えることはなく、日本国土、日本民族、そしてその存在の根拠となる日本国が見事に一体化しており、そこに初めて日本人として存在価値を見いだそうとしている。「日本を守ることが日本人を守ることである」であり、このためには「日本人は日本を全力を尽くして守らなければならない」と結論づけている。

守るべきものとしてある美しい日本を最初に映像で映し出し、お互いを大切にする日本人の情を物語の展開の中心として、日本があってはじめて日本人が存在することを、2006年度版は訴え続ける。国を愛し、その国を守ることが、日本人に課された義務であるとも2006年度版は語っている。ここに、現在の日本社会のナショナリズム化を見ることができた。

4. おわりに

1973年度版と2006年度版のオープニングを見るだけで、1973年度版は「日本社会への警告」、2006年度版は「日本を守りたい」、とそれぞれ観客に伝えようとするメッセージが異なっていることが理解できる。内容面において、1973年度版は国家と国民を分離して考え、国家は国民のため存在し国家が消滅しても国民は一個の人間として残る、と語っている。2006年度版は、国家と国民を一体と考え、国民は国家があって始めて価値があるもの、と語っている。つまり、1973年度版では「国民を守ることが、国がやるべきこと」で、2006年度版では「国を守ることが国民のやるべきこと」である。このように、二作の映画の主題が歴然と異なっていることが、簡単に理解できるであろう。そして、共にヒット作であったことから、その時代の民意を反映していると言える。すでに2006年度には日本社会がナショナリズムへと動いていることが分かる。

また、二作の映画はともに、そこに在日外国人について最後まで語ることはなかった。特に、2006年には在日外国人の数は、既に全人口の2%にも達していた。しかし、映画にお

いて、彼らをどのように本国に帰すかという試みはついに見られなかった。グローバル化を迎えても、日本人の関心事は唯一日本人だけであることも、映画は物語っている。このような日本人の傾向は、日本社会のナショナリズム化にさらに拍車をかけていこう。

今回、日本におけるナショナリズム化に対し、二作の映画を比較し考えてみた。しかし、これ以外にも、1973年度版では、山本総理、田所博士、渡老人、さらに「D計画」の推進者たち全てが男性であったのに対し、2006年度版では総理代理として日本を守り抜いた鷹森危機管理大臣や、レスキュー隊員として人命救助を行う阿部玲子など、女性の活躍が目立つなど、時代の違いが伺われた。

映像資料を使った教育は、特に日本語教育において盛んに活用されている。しかし、そのような映像資料は、日本語教育のために製作されたもので、数は限られおり学生が興味を示すものはすくない。これに対して、日本学教育の映像資料はそのため製作されたものでなくてもよく、日本に関する映像全てがその対象といえ、無数にあるといえる。今回紹介させていただいた映画『日本沈没』もその一つである。本稿を見せるだけでも、学生たちの日本学教育資料となるであろう。

【参考文献】

- * 樋口尚文 『「砂の器」と「日本沈没」 70年代日本の超大作映画』 筑摩書房 2004年
- * 『月刊シナリオ』 2006年9月号。
- * 『東宝特撮映画大全集』 ヴィレッジブックス、2012年
- * 小松左京 『日本沈没』 上下 光文社 2006年(1973年)
- * 고평국(약) 『일본침몰』 범우사 2006년
- * 구견서 『일본영화와 시대성』 2007년 제이앤씨
- * 1973年度版映画 【日本沈没】
(<http://flvr.pandora.tv/flv2pan/flvmovie.dll/userid=sakuraxoo&prgid=42865000&countryChk=ko&skin=1>)
- * 2006年度版映画 【日本沈没】
(http://www.youtube.com/watch?feature=player_detailpage&v=IUp3rQXuYZA)

要 旨

SF作家小松左京の小説『日本地没』が1973年に発刊された。「日本が沈没し、日本人は放浪の民族となる」という内容は、歴史的に他国から侵略らしい侵略を受けることなく、島国日本に籠もってさえいれば安全であった日本人に大きな衝撃を与え、瞬間に当時空前のベストセラーとなった。その後、この小説を原作とする映画が1973年と2006年に製作されたが、この二作品はそれぞれの時代的背景を反映し、観客に訴えようとするものが異なっている。共に当時のヒット作であったため、その時代の民意を反映していると言える。この作品を比較することによって、現在の日本社会のナショナリズム化への動きを見ることができた。

1973年度版は、国家と国民を分離して考え、国家は国民のため存在し、国家が消滅しても国民は一個の人間として残る。日本国土が沈没し日本国が滅亡した後は、世界各国に移住しても生き延びることが重要で、そこで日本人であることに拘る必要はなく一個の人間として生きていけばいいと結論づけている。

2006年度版では、「国」と「国民」を切り放して考えることはなく、日本国土、日本民族、そしてその存在の根拠となる日本国が見事に一体化しており、そこに初めて日本人として存在価値を見いだそうとしている。「日本を守ることが、日本人を守ることである」であり、このためには「日本人は、日本を全力を尽くして守らなければならない」と結論づけている。

これは、映像資料のため、現在の日本社会がナショナリズムに動いていることがたやすく理解でき、日本学教育の重要な資料と言える。

キーワード： 日本沈没・ナショナリズム化・国民国家・英雄の出現

투 고 : 2014. 11. 30
1차 심사 : 2014. 12. 13
2차 심사 : 2015. 1. 3